

# 政治思想学会会報

*JCSPT Newsletter*

第7号  
1998年10月

## 目 次

政治思想学会 (JCSPT) のさらなる発展のために —— 中 谷 猛 .....	1
—— 課題と展望	
書 評	
政治・言語・歴史 —— 松 沢 弘 陽 .....	2
渡辺浩『東アジアの王権と思想』（東京大学出版会、1997年）を読む	
理事会記録 .....	9
1998年第一回（1998. 5. 23）	
1998年第二回（1998. 5. 24）	
1998年第三回（1998. 10. 2）	
1998-1999年度 理事及び監事氏名 .....	10
1997年度決算 .....	10
1998年度予算 .....	11
新入会員 .....	11
1999年度研究会について .....	11
学会誌刊行に向けての論文募集について .....	12

## 政治思想学会 (JCSPT) のさらなる発展のために —— 課題と展望 ——

代表理事 中谷 猛

去る5月24日の理事会ではからずも互選され、同日の総会においてご承認いただき第3期の代表理事となりました。当会の設立準備段階から多大の労力を払われた初代の代表理事有賀弘氏と次の田中治男氏のアイデアに富む学会運営とその組織化へのご尽力のおかげで政治思想学会が順調に発展してきたことは会員のみなさんもよくご存知のとおりです。振り返りますと、1989年に第1回研究会を早稲田大学で開催し、そのあと4回の研究会を重ね、1994年5月に規約を定め「政治思想学会」となった当会はほぼ10年の歩みを経て、会員数も360名を超えるまでになりました。政治学の諸分野の活発な動きのなか政治思想の研究環境の整備・発展を願い、一方では研究者の組織を内にも外にも開かれたものとして、また若手研究者を重視しつつ、他方研究者の国際交流を促進するという目標に向かって今後も私たちが努力しなければならないことはいまでもありません。とりわけ政治思想学会の土台を強化し、いわば「コンクリート」でそれを固める仕事があります。その一つに学会専門誌の発行の問題があり、「会報」の内容をさらに充実するとともに、わが国ではじめての専門誌発行のための具体的計画とその態勢をつくることだと思えます。会員のみなさんがこの事業について積極的な提言をよせてくださることを期待しています。

また研究者の国際交流を促進する活動は、グローバル化が進むなか一層重要となりますが、その活発化のためには会員の英知を集める必要があります。資金調達の問題はいうにおよばず、パソコン利用による研究者のネットワークづくりやたとえば英語による論文発表の促進などは検討してみる課題となるでしょう。

一方国内では「会報」にみられるようにそれぞれの大学を中心に研究会活動が盛んですが、若

手研究者の輪を広げるうえでもこうした各地の研究会の交流ができれば、学会の日常的な研究活動に有益だと考えられるので、情報提供の方法など具体的に検討してみます。ところで、21世紀を目前にして私たちの生活環境も時代の様相も日々変化し、思想界では論者の言説に「漂流」という言葉さえ目立ちます。だが政治思想の研究にかぎっていうと、変貌する現代政治を見すえ、人類の知的宝庫から取り出された思想的遺産に斬新な切り口をもって迫る業績が次々と発表されています。従来の個人・主体概念に疑問符がつけられ、脱国民国家が叫ばれる状況と同時に臓器移植に関わる生命倫理のような未知の諸問題が山積している現在、私たちには大きな歴史的視野に立って過去との対話を重ね、未来への展望を切り開く諸価値や原理の構成を追求し、様々な新しい視角を提供してゆくことがとくに必要ではないでしょうか。現代社会が求めている様々な政策的な提言の背景にはこうした学問的営為の幅広い展開が期待されているにちがいありません。会員のみなさんにとって政治思想学会が一層魅力あるものになるには、開かれた研究会の精神をもって年一回の研究集会の内容をさらに充実し、日常的な研究活動を支えるネットワークの整備に力を注ぐことが求められるでしょう。若い世代の会員が多数いる当会は、その長所を生かせば、学会の活動が大きく飛躍することはいうまでもありません。そのため会員のみなさんの率直な意見が理事会に寄せられることを願っています。最後になりましたが煩雑な事務局の仕事をいままで引き受けられた松本会員をはじめとする早稲田大学の関係者のみなさんにお礼申しあげるとともに、新事務局が慶応大学の鷺見研究室に、また「会報」担当が東京都立大学の宮村研究室に引き継がれたことを申し添えておきます。

# 政治・言語・歴史

渡辺 浩 『東アジアの王権と思想』(1997年)を読む

松沢 弘陽

1960年代以降の近世思想史研究は、丸山真男氏が『日本政治思想史研究』で打ち出したパラダイムに対する、さまざまな角度からの批判と修正を一つの動機として進められて来、多くのすぐれたモノグラフが生まれた。近年はそのような成果をふまえて、近代あるいは天皇制国家形成への見通しまでを含めた、新しいパラダイムともいえるべき、近世思想史の全体像をみざす気運が熟しつつあるようである。1977年から94年にかけて発表された労作10編をまとめた、渡辺浩氏の『東アジアの王権と思想』は、このような学問的動向の中に、きわだった学問的個性をもって重要な位置を占めている。論理的には慎重で厳密だが軽やかな文章(注1)の中に、さりげない形で新しい知見、通念の意表をつく解釈、大胆な問題提起が随所にちりばめられている。

この本の学問的個性を特徴づける要素として、誰の眼にも先ずいちじるしいのは、対象とする世界さらに引照する世界の広がり、とりあげられる問題群の多様さである。著者自身、なぜ「東アジア」か、「はしがき」で説明する。しかし、著者の視線が「東アジア」からさらにイスラム世界に向けられるにいたっていることが、各所にうかがわれる。そして東アジア世界の問題はしばしば西欧の世界に引照される(たとえば、近世後期以降の日本にとっての「中国の非「中華」化」とヨーロッパ17・18世紀における古代近代優劣論争と近代派の勝利、p.251)。研究の対象についてだけでなく、研究の方法についても引照される世界は広くかつ最近の発展にまでわたっている。近年の国際的な東アジア研究の発展を反映して、中国、韓国、米国の日・中・朝鮮研究の成果が参照されるのはいうまでもなく、西欧の人文社会科学の古典が引照され、さらに

心性史や思想史研究における言語論的転回が産み出した新しい仕事にしばしば論究される。アナル派や歴史人類学からの「影響」などといわれることは、著者にとって心外だろうが、著者のこれらの仕事への「共感」や、本書とそこに論及される諸研究との「通底」はおそらく否定されないだろう。もしそうならそのことは、本書の個性や、現代の国際的な歴史研究の中でのその位置を考える上での手がかりになるといえるよう。

著者は、本書でとり上げられる、時間的・空間的に広範囲にわたり、一見「とりとめもない」ように見えるかもしれない多様な問題群は、それにもかかわらず「密接に関連し、連鎖して」(i頁)おり、この本を読了すればそれは明らかになるだろうといわれる。しかし、本書を読了すれば、そこには著者がこのべられる以上の「密接」な関連性も見えて来る。そのような関連性とそれを裏づけるものが、本書の個性を特徴づけるもう一つの要因のように思われる。まず、この本の問題群の多くは、著者の先行研究、『近世日本政治思想』や『近世日本社会と宋学』(いずれも1985年)の中に胚胎している。本書1章の主題である伝統的政治社会における儀礼の問題にいたっては、著者の処女作「道」と「雅び」——宣長学と「歌学」派国学の政治思想史的研究——(『国家学会雑誌』87の9=10、11=12、88の3=4、5=6。1974-75年)で宣長の「ものあはれ」観の背景として撰関時代の宮廷儀礼に注目する(87の9=10、pp.37,42)中で着想されている。本書の背景には、著者が学問生活を始めて以来、一貫して追及され成熟して来た関心の系統性がいちじるしいのである。

この本全体にわたる関連性はさらに、実証的記述の次元をこえたいわばメタ次元とも云うべ

き、政治や歴史についての一般理論によって裏打ちされている。それはある場合には、「一般に」という一種の定型句によって導き入れられ、著者の理解をまとめたのべられる。またある場合には、実証的な記述の中に織りこまれている。本書の各所に光っている、新しい知見、通説への挑戦、大胆な仮説的解釈の提示は、著者の史料と研究文献との双方についての博搜と丁寧で深い読みをもとにしていることは云うまでもない。しかし、そのような読みを可能にしたもう一つの条件は、著者の探究を裏づける一般理論の問題発見（ホイリスティッシュ）力ではないか。またその一般理論が、著者がとりあげる多様な問題群を一段上のレベルで背後から関連づけているのではないか。本書の実証的記述の中に提示された新しい知見や解釈は、さまざまな問題領域にわたって数多い。その一つ一つについて、最近の研究動向に引照しながら著者独自の寄与を特定し、それについて問うことは紙数が許さないし、筆者の能力を超える。ここでは先ず、本書の中に示されるいくつかの一般理論を概観し、その上で一つの章にしぼって、具体的な内容に立ち入ることにしたい。

1 一般理論のうち最も詳しく展開されているのは、政治社会、政治体制あるいは政治体の成立と機能を支える思想の役割についての理論である（とくに「はしがき」と第1部2章）。著者は、あらゆる支配、政治体制を成立させる決定的な基礎は、多数の被支配者のそれらについてのイメージ・意識・言語だとする。こうしたイメージ・意識は特定の体系的な思想、いわゆる「体制教学」とは異なりはるかにアモルファスである。それを表現する言語も、体系化された思想のキイ概念とはちがって、一般に流通する日常語である。逆に云えば、一般論として、政治体制は政治体制である以上当然に「体制教学」によって支えられるという見方は事実ではない。「体制教学」は政治体制の特定の条件のもとではじめて現れるということになる。政治体制における思想についての理論の系として、特定の思想—本書では中国における儒教—が政治体制

と「結合」して「体制教学」を形成する生理と病理、そして「結合」から解放されるダイナミズム、についての理論が示される（3章とくにp.88、p.110 注58など）。

2 政治体制における思想についての理論ほど前面に押し出されてはいないが、著者はさらに政治とは何か、それはいかなる条件のもとで成立つか、という政治学における究極の問いに踏みこむ。「政治の中心問題」は「人間の共存」である（p.98）。そして、「理」への美的嫌悪という普遍的現象をとり上げる著者は、その文脈の中で「社会構成に欠かせない何らかの「理」」（p.189）と断言的にのべ、さらに「「理」—あらゆる事物のあるべき在り方—なしに、人間はいかにして共存して生きていけるのであろうか。普遍的な人間性の自覚によらずに、いかにして人間は倫理的たりうるのであろうか」（p.103）と問う。著者の政治理論は、ほとんどシニカルといえるほどに醒めた実証の上に展開されながら、ここで規範理論に接しているといえよう。政治の世界における「理」とそれへの反発という問題は、おそらく「「道」と「雅び」」以来の一貫した問題だろう。本書では、中国儒学と日本における儒学・国学とは、「「理」と共存構想」という引照枠組を設定して比較されるのである（3章）。

丸山真男氏ふうの近世政治思想史のパラダイムに対する著者の修正は、おそらく政治体制における思想のとらえ方の点で最もラディカルだといえよう。著者は、「徳川政治体制」には、「体制教学」としての朱子学なるものは存在しなかったという、歴史の事実認識のレベルでの批判にとどまらず、さらにさかのぼって、政治体制の成立における思想の機能という、政治の一般理論のレベルでの批判にまでふみこんでいる。たとえば、著者も丸山氏も、支配を成り立たせる多数被治者の「意見」についてヒュームの「政府の第一原理について」に引照する（本書p. v、丸山氏の著作では『日本政治思想史研究』以後の発表だが、「支配と服従」および『政治の世界』）。丸山氏の場合はこの「意見」の問題がた

だちに、ウェーバーの支配の社会学における正統性の問題としてとらえられる。『日本政治思想史研究』では「家康は儒教のうちに単に将来の教化手段のみでなく、江戸幕府の正統性の拠点を模索していたのかもしれない」(p.13、傍点は引用者)とされ、正統性は「体制教学」につながってゆくようである。著者の場合どこまでも多数被支配者のアモルファスな意識に関心を向けるのに比べれば、丸山氏の場合は、いわば hegemonic な上からの、そしてより自覚化された思想の方に関心が向っていることがうかがわれよう。

さらに政治をどうとらえるかでも、丸山氏と著者は対立するようである。『日本政治思想史研究』では「政治的なもの」が限界状況を場として考えられ、「絶対的主体」としての「政治的支配者」の登場に近代的政治の起点が求められていた。徂徠の政治思想は、このような「支配者」像を打出したという視点から、近世政治思想における転回点としてとらえられる。本書での徂徠理解はどうか。「反自由、反平等、そして徹底した反民主主義の、悪魔的に巧妙な共存の構想である」(p.103。なお著者の「徂徠学と「1984年」」(『創文』1984年2月)参照)。このような対照は、主体・客体関係としての政治を基準とするか、「理」に支えられた共存としての政治を基準とするかの差がもたらした分化ではなからうか。(注2)

3 著者は、「体制教学」を構成する教義的概念よりは、多数被支配者の意識を表現する日常語に注目する。そのような関心はおそらく著者が引照する、思想史研究におけるいわゆる言語論的転回などとも「通底」しているのだろう。それぞれの時代に固有のことばへの鋭い注目と方法意識によって著者は、近世・近代初頭日本の世界像や歴史意識についての新しい見方を打出すことに成功した。そして何よりも、天皇制国家のイデオロギーに裏うちされた言語体系という「ことばの壁」を解体して、近世の政治社会の現実と直面することをより容易にした。著者は本書の冒頭、「序」で、近世史の叙述において

これまで広く用いられたいくつかの基本的用語と絶縁し、近世の人々自身が用いたことばを吟味して適切なものを選び、それに替えることを宣言する。何よりも先ず、「幕府」「朝廷」いずれもが後期水戸学の影響の中で一般化し、皇国史観の基本的な語彙となった事実<sup>1</sup>に注意が促される。「天皇」も、公式に用いられたのは、600年余の中断の後ようやく19世紀初頭であり、過去に遡って全てを「天皇」に呼び換えたのは1925年、この変更の背景にも皇国史観の影響が推定される。「藩」は、一般に用いられるようになったのは18世紀中葉以降、公式に用いられたのは版籍奉還から廃藩置県までの間にすぎない。著者はこれらにかえて「公儀」・「禁裏」を、また「院」と「禁裏(様)」を用いると宣言する。「藩」はそれが指す武士組織の実態に注意して用いるが、「幕藩体制」とは縁を切って「徳川政治体制」とする。

「朝廷」・「幕府」・「藩」といった用語が近世社会において今日のような意味では使われていず、これらの用語が歴史の現実とそぐわないことは、研究者の間でうすうす意識されていた。しかし皇国史観をきびしく批判する歴史家も、今日まで「朝廷」や「幕府」を当然のように用いて来たという事実は、皇国史観の呪縛がいかに巧妙で執拗かを示しているといえよう。著者は、そういうことばは使わないけれども、日本における国民国家、天皇制のイデオロギーの呪縛の根もとを見破り(注3)、近世日本という歴史的個性に直接向きあう道を開いたといえよう(なお、著者の『近世日本政治思想』10章「尊王論」の前提)、『近世日本社会と宋学』第二章第一節、および「雅び」と象徴(『創文』1984年1月、を参照)。それぞれの時代に固有の用語への注目が可能にした新しい理解はこれにとどまらない。

現在までつきまとう皇国史観の脱魔術化を行った著者は、「皇国」的世界像生成のプロセスを明るみに引き出す。著者は「皇国」が「巧妙な構造をもった日本語」(傍点原文、p.148)であること、それは日本にのみ許される「自称にして誇称」(p.149)であり、「いわば「皇国」的世界像の見事な象徴」(同前頁)であることを明ら

かにする(6章「泰平」と「皇国」)、なお『近世日本政治思想』11章「華夷思想と日本国観」参照)。著者によれば、通念に反して、「皇国」の世界像は幕末の危機にはじめて生れたのではない。それに先立ち18世紀後半、「泰平」への自己満足の中で生みおとされるという、はなはだ逆説的でこれまで気づかれることがなかった、前史があり母胎があったというのである。著者はまた、「泰平」謳歌の時代から多くの江戸時代人の口にされるようになった、「皇国」よりもはるかにポピュラーで日常的なことば「開ける」に注目する。「開ける」は、江戸時代人の時間と空間との両方にわたる歴史像の表現であった。このような「世の開け」像が19世紀半ばに、西洋からの「文明の進歩」に出あった時にそれを積極的に受け容れる素地となって、「あの浮かれたような「文明開化」の社会的流行現象」(p.220)をもたらした、とともに日本人の「今」にいたる歴史意識に大きな問題をかかえこませることもなったのである(9章「進歩」と「中華」)。「開ける」と「進歩」ということばは、著者のもう一つの一般理論に深くかかわっている。

4 これまでに見た著者の一般理論は、歴史離れたその意味で抽象的な理論ではなく豊かな歴史感覚に裏づけられている。ことばの歴史性に著者は鋭い感覚を見せる。政治体制についても、歴史の変化の中でのその形成・成熟・衰退の過程に関心がよせられる。そして本書の最後、9章「進歩」と「中華」では、歴史についての根本的な問いが端的に示される。「歴史に方向があるのか、あるとすればいかなる方向なのか」(p.218)。「歴史的時間のなかで、「今」をどう位置付けたいのか」(p.216)。そして「今」を時間的に定位することは、本書では世界の中で自他を空間的に定位する営みとむすびついている(pp.219,220)。そして歴史がいかなる方向性も欠く無意味で不可解なカオスでしかなく、そこに超越者の介入も信じられないならば、「事は深刻である。「今」を定位することができないからである。…要するに先のことは解らない、…である以上、「今」の自分たち

がそこそこに生きていければそれでよい、…—そういう弛緩した刹那主義が蔓延することにもなる」(pp.217-218)。このような問いの半面は、西洋に生れた「進歩」の観念の現代における意味への問いである。その「単線的」歴史観のゆえに、また「西洋中心主義」のゆえに、繰り返し破産宣告を受けて来た「人類の進歩」は、本当に意味を失ったのだろうか(pp.218-219)。著者はこのような根元的な問いをもって、19世紀後半の中国と日本における、伝統的な歴史意識と西洋の「文明の進歩」との出あいを解明する(9章「進歩」と「中華」)。

9章は、西洋を新しい「中華」、「文明の進歩」の「先達」・「先頭」とする歴史意識がゆきついた、「今」が直面する問題を示唆して結ばれる。「こうして先達の後を追って進んでいくとき、その先には何があるのでしょうか。…たぶん、それは先頭が心配することなのであろう。しかし、もしも先頭が道をまちがっていたらどうするのであろうか。あるいは悲惨なことに、いつのまにか先頭にいる自分を見出したら、どうしたらいいのであろうか」(p.258)。そして「歴史の進行について自ら考える」ためには、歴史に普遍的な原理があるのか、あるとすればそれは何なのかという「始めの問題に立ち返ることが、おそらく必要なのであろう」(p.258)という問いかけで本書は終わる。

歴史的時間の中で「今」を定位するという強い関心は、本書のいくつかの論文を導いているようである。たとえば6章「泰平」と「皇国」。「泰平」への自己満足の中に自己中心的な「皇国」意識や「日本人論」が生れたという思想の流れ—著者は「それは多分、日本政治思想史上、なお記憶すべき前例をなしている」(p.153)とする。「前例」は「今」にとってだろう。この章の記述は、それから二世紀後の「平和と繁栄」の国の「優越性」の意識とその問題性を、言々々々ほとんどアレゴリカルに指唆しているようである。また7章「理」の美的嫌悪と暴力」。三島由起夫の『鏡子の家』に造型された、「およそ社会構成を可能にする原理・理論・道理一般…を醜悪と感じ、高踏的に嫌悪する」美意識がその

主題である。「今」におけるこのような作品には、すでに先行者があった。日本浪漫派である。「しかも両者は相当程度、過去に「一度目は悲劇として」演じられた日本思想史の事件の再演だった」(p.186)。「一度目」は賀茂真淵から宣長を経て中島広足にいたる国学とりわけ「歌学派」の思想的道程である(伴信友と「ヤス」)。「ヤス」はつかこうへいの小説『蒲田行進曲』のヒーロー『創文』1983年1月、および「雅び」と「象徴」[ここでも宣長の古学と三島の『文化防衛論』との時間をこえた対応関係が主題になっている]『創文』1984年1月)。なお「一度目」の「悲劇」をとりあげた長編が、著者の出世作「道」と「雅び」(『国家学会雑誌』)である。

「理」の美的嫌悪と暴力」のスタイルは、著者が『創文』に連載した六編のシリーズを想起させる。それは「日本思想史と現在」という共通の表題の下にまとめられている。小論に引いたその中の何篇から、またシリーズの題から容易に想像されるように、各編は「現在」のさまざまな問題を近世思想史のさまざまな出来事と自由に関連づけて論評する。それはしかし、歴史はカオスであって何の秩序もない、歴史の出来事は主観的な「面白さ」を触発する機会に過ぎない。だから興にまかせて何でもとりあげ面白い物語を作ればよいといった、筆のすさびとは類を異にするだろう。著者の場合、日本思想史の過去から「現在」を通じ将来に向うある「方向」の存在が前提され、その中で成り立ちうる過去と「現在」との意味連関が探られているように思われる。

著者の歴史の原理論への問いは、本書全体を貫く比較史の方法への問いとも関連しているようである。それが記述の表に現われている例として3章「儒学史の異同の一解釈」の冒頭、日中二つの儒学思想史の比較と解釈の方法を論じる部分(pp.72-76)。そこで著者は、「マルクス主義を含む十九世紀的な単線「進歩」観」(p.73)は言うまでもなく、「西洋の何らかの面が類型として自覚的に追求されるようになる以前について」(p.75)、思想の歴史に何らかの「一般的傾向」が存在するとし、「世界各地の思想史が

基本的に同一の方向に進んでいた」(p.74)などと前提する歴史観、「思想の発展段階論」(p.73)を斥ける。「相互に学びながらも、各地域の思想史が基本的に同一の方向に進んでいたなどと容易に前提してはならないのであろう」(p.75)とされる。本書では溝口雄三、山井湧両氏が名をあげて批判されるが、この点は丸山氏の『日本政治思想史研究』における日・中・西洋の思想史理解の中心にもかかわることは言うまでもないだろう(著者の思想史や比較研究についての見方について、著者の書評論文「B.シュオルツ著『古代中国の思想世界』」(『中国—社会と文化』第7号、1993年)が有益である。)

本書の骨格をなす理論が問いかけるものにとらえられてすでに多くの紙数を費やした。以下とりわけ関心を刺激された章にしぼって紹介し感想をしるしたい。

本書各章のうちで、初出の当時、学界の範囲をこえて最も広く知的な刺激を与えたのは、おそらく1章「御威光」と「象徴」だったろう。それは大方の意表をつき、時に、突如として着想されたような印象を与えた。しかし、一冊に編まれたコンテキストの中に、また著者のこれまでの研究の展開の中に位置づけることによって、出さるべくして出されたことが得心される、その驚きから了解へのへだたりが最も大きいのも、1章であろう。著者は、前著『近世日本社会と宋学』で、「幕府が朱子学を「体制教学として正式に採用」したこと」(p.24)も「儒教が「体制を支えた」こと」も、事実ではないとはっきり述べていた。学界でも、徳川の支配について「脱イデオロギー」性を強調する動きも現われていた。では何が徳川政治体制を支えたのだろうか。その「一側面」と慎重に留保しながら、この政治体制に独自の重要な「支え」について、はじめて積極的・具体的に展開し、「御威光」の支配」(p.40)という概念を打ち出したのがこの論文である(その原型は『近世日本政治思想』に見られる。同書p.72)。

著者の博搜をもってしても、近世史についての学界の趨勢に従った史料や研究の渉猟だけか

らは、このような新しい理解は生れなかったのではないだろうか。先にふれたように著者は、「物のあはれ」論の分析から王朝の宮廷という政治社会における儀礼の意味に注目し、それが近世にも通じることに着眼していた。この問題は、本論文では、政治学・社会学における儀礼・象徴の問題としてさらに深められている(2章の注9,16,26などいくつかの注を参照)。著者はまた本論文に先立って政治社会の成立における多数被支配者の意識の支持という公理を、彼等のイメージの問題として掘り下げていた(2章「制度・体制・政治思想」)。著者はまたおそらく、その日常語への感覚と関心から、「御威光」という近世社会に流通したベーシックな—しかし、それ自体として検討の対象とされることが稀だった—ことばに注目した。近世社会を超えて一般的な問題への関心と、近世社会の研究においてはそれとして意識されることが少なかったことからへの注目とが結びついて、著者に徳川政治体制をとらえる新しい視点を用意したのではないだろうか。本論文は徳川時代の身分制度や諸儀式についての膨大な史料を素材としている。著者が説明するようにそれらの個々は既によく知られ論じられている。しかし、それらは必ずしも相応の学問的扱いを受けては来なかった。著者はこれら数多くの多様な史実を一つに結びつけ、生命を吹き込んだ。それが「御威光」の支配」である。

「御威光」は、支配者についての「圧倒的な実力のイメージ」によってその根底を支えられている。それは膨大で異常なまでに発達した象徴・儀礼の巨大な体系によって保たれ、「理屈より心に、知性より諸感覚と感性に訴える」ことによって「体制維持の一助となっていた」(pp.41, 19)。著者は同時に、「この実力のイメージに依拠する支配」(p.45)が、それ故の強さとともに「奇妙なディレンマ」(p.40)を孕んでいたことを探り出す。「(清朝や李氏朝鮮の支配のように)超越的な道理の支えを持たない「御武威」「御威光」の支配は、おそらくそうした強靭さをもちえない」(p.46)。「御威光」の支配が成功し、「御静謐」が続くなかで「御威光」は傷つきやす

いものに変質し、ついには小さな敗北によって破滅することを恐れて自滅した(ペリー艦隊来航の衝撃)。「御威光」の支配」論は、「体制教学」なき支配としての徳川政治体制の理解における野心的な企てであり、東アジアさらにそれをこえる世界の王権論にも重要な寄与といえよう。ただそれが通念をこえ意表をつくものだっただけに読者のがわからはさらに説明をして頂きたい問いが残る。I部にのべられた「政治体制の思想」の政治学は、政治学の議論としてなおつめる余地を残しているだろう。2章の記述にも、1、2 両章の記述の関連にも、少しわかり難い箇所がある。「御威光」の支配」の実態についていうと、この支配の代償の問題はどう考えられるのだろうか。身分・格式の演出が肥大するにつれ巨額の費用を費やし全体制的な奢侈のもとになったという、狭義の経済的コストについては言うまでもない(本書22ページにその一部引かれる『秘本玉くしげ』上の一節全体はそのことへの批判である)。身分・格式の差異をとめどなく誇張し、「全支配組織が「御威光を笠に着」」(p.36)る政治体制で何が起こるだろうか。

徂徠は「御役人モ今ハ上ノ御威光ヲ以テ、下ヲ推ヒシグコトヲ好」み「上ノ御威光ナレドモ、実ハ重役人ノ高振強ク、手前ノ威権募ル仕方ナリ」(『政談』巻之三)と指摘する。「御威光」委譲に伴う権力の放恣な膨張であろう。それは上下の「隔絶」という支配組織の機能不全を惹き起す(たとえば『太平策』『秘本玉くしげ』下)。また「推ヒシ」がれる者に生活の難儀や屈辱感をもたらす。本書に引かれる12才の渡辺華山はその一例である(p.203)。福沢諭吉は本書(p.54)の注に引かれる『学問のすすめ』の記述の少し後で、「御上」のただ食、賃銭ふみたおしや人足へのゆすりたかりまでを記し、『福翁自伝』では、幕府や親藩の道中のために渡船や人足を横取りされた憤懣を記している。「御威光」に恐れ入るよりは、憤懣を鬱積させることも少なかつただろう。「御威光」の支配」論は、本来被支配者の意識やイメージから出発したのが、議論の展開の中で、いつか、支配者による儀礼の演出のがわに力点が移り、また支配する者の

がわで意図せず、またおそらくは気づくことがなかった副次効果や逆効果に必ずしも十分目配りされていないように思われる。ここにふれたのは「周知」の事例にすぎないが、著者はその「御威光」の支配論の中で、こうした問題をどう扱うのだろうか。

以上は「御威光」の支配体系内部の問題だが、体制の他の「支え」との関係はどうだろうか。被支配者の生活と利益の実現という体系との関係はどうなのか。近年の百姓一揆研究には、モラル・エコノミー論—支配者の仁慈に対する期待への注目—の観点からのすぐれた業績が出ている。このような分析と「御威光」の支配とはどう関連するだろうか（百姓一揆の「要求の根拠と論理」についての著者の見解は、『近世日本政治思想』pp.199-200にうかがわれる）。「恩威並び用ふ」もよく語られたことばだったが。

\* \* \* \* \*

本書は、重厚長大ではないが、知的な挑発に満ちた書物である。「読ム者悟レ」と云わんばかりにさりげない文体も、挑発することにおいて、さらに挑発的である。近世東アジア史の個々の問題群の解釈においても、全体を裏うちする政治や歴史の理論においても挑発的である。さらにこれら全てを通じてうかがわれる学問的営みの姿勢においてそうである。本書の記述には、著者の学問的態度をおのずから語るように思われる面があり、とくに6章「泰平」と「皇国」はその感が深い。本書の諸論文は「泰平」と「皇国」の二十世紀末版がひろがる中で書きつがれて来た。そこには、現状への自己満足に身を委ねた学問や評論とはちがって、政治や歴史についての、啓蒙の遺産—おそらく戦後啓蒙のそれも—への穏やかな懐疑をくぐった「真率」ともいえる態度が一貫しているようである。

筆者にとっては、本書を裏打ちする一般理論だけでも十分に挑発的であり、それを辿ることに紙数の多くを費やすことになった。個別の問題群についてはほんの一部にふれたにすぎず、著者の学問的態度については、それが筆者の心をとらえたことばを記すに終った。小論に述べた

ことが大きくは的はずれでないことを、とくに具体的な問題群について本格的な批評が現われることを、願って筆を措く。

注1 批判の対象とされるこれまでの有力な見解などは、たいてい「あの・・・」「例の・・・」とか「周知のように」という頻出する定型句であっさり片づけられる。しかし著者にとっての「周知」は、読者にとってのそれとは必ずしも一致しない。とりわけ本書のように、専門学界の外の一一般読者や、将来の読者にも読まれるだろうし、そのことが望まれる研究においては、もう少し「周知」の内容にふみこんで説明されることが望まれる。

注2 ただ、ここだけから二人の政治観の異同を十分にとらえることは無理だろう。丸山氏は、こうして切り開かれた近代的政治の目標として、相互主体的な自由民主政を考えている。他方、著者の「理」における「共存」としての政治という概念は、本書の要石の一つであるが、外延はかなり広く、いま一步踏み込んだ説明が望まれる。

注3 国民国家のイデオロギーからの解放という問題に関してふれたいのは、5「東アジアにおける儒学関連事項対照表—19世紀前半—」である。4ページに収められたこの表は、それをまとめるまでに多大の力が注がれたろうし、比較という視点で明らかにされた成果は豊かである。その中で「琉球」を固有の国家としてとりあげることは、19世紀前半という時期については当然とはいえ、ここにあげられたような43の事項について詳しく調査するということは、「琉球処分」以降の国民国家のイデオロギーに拘束されている限りとうてい不可能だったろう。ついでにいえば越南が東アジア世界におけるこのような形の比較研究の中でとり上げられたことも画期的といえよう。

1998・8・29

## 理 事 会 記 録

1998年第一回（於一橋大学、1998年5月23日）

次期（1998－1999年度任期理事会）理事及び監事候補を決定した。（同日総会において承認。メンバーは別掲）

1997年度決算報告を確定した。（同日総会において承認。内容は別掲）

1998年度予算案を決定した。（同日総会において承認。内容は別掲）

事務局を1998年7月1日をもって、早稲田大学から慶応大学に移転することを決定した。（事務局責任者は鷺見誠一理事）

学会誌発行に関する諸問題を検討するため、「学会誌準備委員会」を発足させることに決定、メンバーは田中治男、渡辺浩、佐藤正志、吉岡知哉の各理事と定めた。

『会報』の編集人を、次号より、宮村治雄理事とすることを決定した。

来年度（1999年）の学会企画について、小野紀明理事より説明があった。統一テーマは「20世紀と政治思想」。

2000年の学会は大東文化大学で行うことを確認。担当校責任者は和田守理事、企画協力者を飯島昇蔵理事と決定。

新入会員の承認。（別掲）

1998年第2回（於一橋大学、1998年5月24日）

新代表理事として中谷猛理事を選任した。

新入会員の承認。（別掲）

1998年第3回（於同志社大学、1998年10月2日）

1) 今後の運営方針について

中谷猛新代表理事（立命館大学）より、本ニュースレター冒頭に掲載された趣旨での運営方針の表明がなされた。

2) 1999年度研究会の開催・内容について

1999年度の研究会に関しては、別掲のとおり、小野紀明担当理事（京都大学）より説明があり、了承された。また2000年度の研究会に関しては、

前回の理事会での議論を受け、大東文化大での開催が決定され、その企画の任に、開催校の和田守理事と飯島昇蔵理事（早稲田大学）があたることになった。主として若手研究者を対象に、前回の一橋大学での研究会で試みられた「自由論題」での研究発表を導入するかどうか、また企画による報告者も若手研究者を主体にして構成すべきかが議論され、基本的にその方向性が再確認された。

なお2001年度以降の予定として、立教大学での研究会、さらにその翌年度は法政大学が候補にあがっていることが報告された。

3) 「学会誌準備委員会」について

懸案であった学会誌の創刊について、その形態、出版時期、編集方針、編集委員等について議論がなされ、次のような方向性が確認された。

- ・商業出版社からの出版とするか、それともいわゆる「自費制作」とするかが、それぞれの見積書をもとに議論され、当面は自費制作で発足させることが決定された。なお、田中治男理事（成蹊大学）から、ある財団法人による学会誌助成の可能性についても報告があった。

- ・創刊時期は2000年春の研究会に間に合わせる形で企画を急ぐことが決定された。

- ・編集委員として平石直昭理事（東京大学）、千葉眞理事（国際基督教大学）、小野紀明理事（京都大学）、菊池理夫会員（松坂大学）が選任された。なお編集にあたっては1999年度研究会での報告が盛り込めるよう、開催校の企画担当者として協力することが確認された。

- ・学会誌の内容に関して、企画を主体とすべきか、公募論文を主体とすべきかが議論され、研究会の企画と学会誌の企画・編集を有機的に関連させた依頼原稿を一方の柱としつつも同時に、主として若手研究者を念頭に、積極的に論文の公募を行っていくこととなった。創刊までの時間が切迫しているため、本ニュースレターでも論文公募のアナウンスを行う旨が確認された。

4) 会費の値上げについて

学会誌の発行にともない、会費の値上げの必要性が指摘され、議論が行われたが、この問題

に関しては継続審議となった。

5)「会報」の編集について

宮村治雄担当理事（東京都立大学）より政治思想学会会報の制作が順調に進行し、まもなく完成する旨、報告があった。

6)新入会員の承認

5名の新入会申込者についてその入会が審議・承認された。（本ニュースレター、「新入会員」紹介の項目参照。）

）新入会員の承認

7)その他

千葉眞担当理事より、来年度京都大学での研究会への外国人学者招聘に関して、当初予定していたシャンタル・ムフ女史の来日が不可能となり、ティレル・カーヴァー氏（ブリストル大学）とともにボブ・ジェソップ氏（リーズ大学）を招いて、20世紀におけるマルクス主義というテーマで講演をお願いすることが報告され、承認された。なおこの報告は土曜日の午前中にセッションを設ける旨、小野担当理事より説明があった。（文責：事務局）

1998 - 1999 年度理事及び監事

(1998年5月23日、総会において承認)

理 事

飯 島 昇 蔵 (早大)	飯 田 泰 三 (法大)	岩 岡 中 正 (熊本大)
小 野 紀 明 (京大)	加 藤 節 (成蹊大)	佐々木 武 (東京医科歯科大)
佐々木 毅 (東大)	佐 藤 正 志 (早大)	鷲 見 誠 一 (慶大)
関 口 正 司 (九大)	添 谷 育 志 * (東北大)	田 中 治 男 (成蹊大)
千 葉 真 (ICU)	塚 田 富 治 (一橋大)	中 谷 猛 (立命館大)
平 石 直 昭 (東大)	松 本 礼 二 (早大)	宮 村 治 雄 (都立大)
吉 岡 知 哉 * (立大)	米 原 謙 * (阪大)	渡 辺 浩 (東大)
和 田 守 (大東文化大)		

監 事

藤 原 孝 * (日大)	星 野 修 (山形大)	*は新任。
--------------	-------------	-------

政治思想学会 1997 年度決算

(1998年5月23日、総会において承認)

収入	金額 (円)	支出	金額 (円)
前年度繰越金	1,269,473	研究会開催費	214,567
会費	951,930	会報費	261,810
研究会参加費	26,000	事務局費	98,669
利子	1,638	通信費	9,620
		名簿制作費	261,205
		印字サービス費	1,200
		繰越金	1,401,070
計	2,249,041	計	2,249,041

## 政治思想学会 1998 年度予算

(1998年5月23日、総会において承認)

収入	金額 (円)	支出	金額 (円)
前年度繰越金	1,401,070	研究会開催費	300,000
会費	900,000	会報費	200,000
研究会参加費	20,000	事務局費	350,000
利子	2,575	名簿制作積立金	100,000
		予備費	1,373,645
計	2,323,645	計	2,323,645

## 新 入 会 員

(1998年5月23日、24日承認)

浅野 房一	石黒 太	犬塚 元	井上 弘貴	奥貫 泰行
笠井 昭文	葛西 弘隆	神谷 昌史	木部 尚志	倉爪真一郎
小泉 龍人	佐藤美奈子	佐藤 瑠威	杉森 慶太	鈴木 宗徳
関谷 昇	高橋 良輔	手島 ウォルフ 逸光		遠山 隆淑
中田 喜万	中野 剛充	西広 一郎	服部 美樹	藤井 達夫
藤倉 俊秀	細井 保	松森奈津子	三谷 祥子	宮ノ原端城
宮本 満治	森分 大輔	山岡 龍一	山口 正樹 (1998年5月23日、24日承認)	
川岸 令和	佐藤 高尚	藤本 眞悟	箭内 任	吉馴 明子

(1998年10月2日承認)

## 1999 年度研究会について

日時：1999年5月29日(土)、30日(日)

場所：京都大学 法経7番教室

統一テーマ：「20世紀と政治思想」

プログラム：

29日午前：招聘外国人研究者報告

「20世紀におけるマルクス主義」(仮題)

報告者 ティレル・カーヴァー氏 (ブリストル大学)

ボブ・ジェソップ氏 (リーズ大学)

29日午後

「ナショナリティーの再定義」

司会 米原謙氏 (大阪大学)

報告者 小熊英二氏 (慶應大学・非会員)

川田稔氏 (名古屋大学)

原武史氏 (山梨学院大学)

30日午前

「歴史と政治的責任」

司会 斎藤純一氏（横浜国立大学）

「＜責任＞をめぐる思考—ヤスパース、アーレントを中心に」

山田正行氏（東海大学）

「歴史の暴力にどう対応するか—アドルノ、ベンヤミンを手がかりにして」

上野成利氏（京都大学）

「責任はどこまで決断の問題であるか—サルトル＝カミュ論争を再検討する」

堀田新五郎氏（奈良県立商科大学）

30日午後

「戦争論」

司会 吉岡知哉氏（立教大学）

「ウェーバーと戦争」

星野 修氏（山形大学）

「孫・蔣・毛の戦争」

光田 剛氏（大東文化大学・非会員）

「現代国際政治における戦争」

太田義器氏（摂南大学）

懇親会：5月29日（土）6時～8時 京大会館

## 学会誌刊行に向けての論文募集について

政治思想学会では学会誌の刊行をめざして目下具体的な作業を進めています。2000年5月に創刊号の発行を目標におくと、予め公募論文等の執筆を会員の皆様にアピールしておく必要があります。学会誌の正式の投稿規定は次の理事会で決定をまって、お知らせする予定ですが、それでは論文作成の期間がなくなります。そこで差し当たり、次の執筆要項を参考に準備をお願いいたします。なお執筆要項は、字数等で変更があるかもしれません。その点はお含みおき下さい。

政治思想学会事務局

1. 字数は25000字以内。ワープロ、コンピュータを使用する場合は一行30字のページ20行で、行間をゆったりととりプリントアウトする。（縦書きでも横書きでもよい。）打ち出した原稿に添えてフロッピー（使用機種、ソフト名を明記の上、応募原稿ファイルにはMS-DOSのテキスト・ファイルを添付するのが望ましい）を提出することが望ましいが、手書きの原稿用紙（200字詰の場合、125枚以内、400字詰の場合、63枚以内）を用いてもよい。

2. 注は各節ごとに、注（1）（2）（3）・・・と入れる。

引用・参考文献の示し方

1) 洋書単行本の場合

K. Marx, Grundrisse der Kritik der politischen Okonomie, Dietz Verlag, 1953, SS. 75 – 6.(高木監訳『経済学批判要綱』(1) 大月書店、1958年、79頁)。

2) 洋書雑誌論文の場合

F. Tokei, Lukas and Hungarian Culture, in The New Hungarian Quarterly, Vol. 13, No.

47, Autumn 1972. p. 108.

3) 和書単行本の場合

丸山眞男『現代政治の思想と行動』第2版、未来社、1964年、140 - 1頁。

4) 和書雑誌論文の場合

坂本慶一「プルードンの地域主義思想」、『現代思想』5巻、8号、1977年、98頁以下。

3. 応募された論文は編集委員会において審査の上、掲載の可否を決定する。この間、編集委員会より原稿の手直しを求めることがある。なお応募原稿は返却しない。

今回お送りするニュースレターにおきまして、手違いからいくつかの誤りがありますので、訂正とお詫びをさせていただきます。(事務局)

10頁右段上から5行目および

11頁下から5行目のポブ・ジェソップ氏の所属

(誤)

(正)

リーズ大学

→

ランカスター大学

12頁から13頁にかけての引用・参考文献の示し方(誤記が多いので次のように差し替えてください。)

1) 洋書単行本の場合

K. Marx, *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie*, Dietz Verlag, 1953, SS. 75-6. (高木監訳『経済学批判要綱』(1)大月書店、1958年、79頁)。

2) 洋書雑誌論文の場合

F. Tökei, Lukás and Hungarian Culture, in *The New Hungarian Quarterly*, Vol. 13, No. 47, Autumn 1972. p. 108.

1998年10月10日発行 発行人 中谷猛 編集人 宮村治雄

政治思想学会事務局 郵便振替番号 00190 - 7 - 571218

108-8345 東京都港区三田2-15-45 慶応義塾大学法学部

鷲見誠一研究室気付

電話 03 - 3453 - 4511 (大代表) fax 03 - 3798 - 7480